

〔提 言〕

## 「家族看護の国際化とグローバル化」に向けて

青森県立保健大学 看護学科教授, 地域連携・国際センター長

中村由美子

日本家族看護学会にとって今年の大きな出来事として、2011年6月25日～27日に開催された第10回国際家族看護学会があげられます。学会員の皆様や世界中から参加して下さった方々からのご支援により、成功裏に終えることができました。この国際学会から、家族看護における国際化について考えてみたいと思います。

日本社会において、グローバル化、国際化の時代と言われるようになって久しいのですが、それでは私たちはどのように考え、具体的に何をしたらよいのでしょうか。歴史的な文脈の中でわが国の歴史を考えると、日本はこれまでも中国やイギリス、アメリカなど多くの国の文化を受け入れ、さらに形を変えて独自のものを作り上げて発展してきました。このことから、北米で発展してきた家族看護も、これからわが国独自のものへと発展する時期がきたといえるのではないのでしょうか。学会を通して感じたのは、家族看護も国際化していくと共にグローバル化していかなければいけないということです。国際化は国単位で考えますが、グローバル化あるいはグローバルイゼーションは地球を単位として考えます。ICN(国際看護師協会)の倫理綱領にも「看護ケアは、年齢、皮膚の色、信条、文化、障害や疾病、ジェンダー、性的指向、国籍、政治、人種、社会的地位を尊重する」と書かれています。日本にも多くの外国からの方が暮らし、また国際結婚も増える中、患者-看護師も互いの考え方や文化、習慣を認めていくことが重要になっています。欧米諸国と比べると日本国内に暮らす外国人の数はまだまだ少ないのですが、多文化共生社会に向けた青写真を描く時期にきているともいえます。家族看護実践も地球単位で考えることが必要となってきているのではないのでしょうか。国際家族看護学会に参加し、その意をあらたにすることができました。政治・経済・文化などが国境を

越えて、世界的規模へと拡大するのと同様に、ちょっと抽象的ではありますが、国という殻をやぶり、積極的に外に発信していくこととともに、日本の中の国際化が何よりも要求されていると感じています。日本という国を通して世界を考えるのではなく、世界の中で日本を考えていくこと、1つの事柄がどんどん世界とつながっていき、ネットワークの構築をすることが必要といえます。そのためにも、今後、社会、経済、文化の地球規模での交流が進み、国際的な協調、共生さらには競争の関係が増大する時代において、我が国の看護系大学に期待される役割を果たすためには、グローバル化の進展をも踏まえた教育環境及び研究の両面にわたって、国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力の強化を目指した改革を進め、社会的責任を果たしていくことが求められています。

国際家族看護学会は、1988年に第1回学術集会在カナダで開催されて以来、北米をはじめとして2～3年ごとに開催されており、世界中の家族看護に関心を寄せる研究者や臨床家が、それぞれの実践や研究成果を発表し、交流を深めてきた歴史ある学会です。第9回学術集会(2009年;アイスランド・レイキャヴィック)では、国際家族看護協会(International Family Nursing Association; IFNA)が設立され、さらなる発展が図られています。

学会では、家族看護を推進してきたメンバーが旧交を温め、また家族看護に関心をもった方々が加わってネットワークの輪が広がり、国境を超えて家族看護の必要性と重要性を認識する機会でした。次は2013年に米国ミネソタ州ミネアポリスで国際家族看護学会が開催されます。日本家族看護学会の皆様、そして世界の家族看護のエキスパートとの出会いと会話を楽しみたいと考えています。